



企画展

新万葉集刊行80年記念
〈万葉集の人間主義—不安な未来への希望を求めて〉

平成29年10月27日(金)～12月10日(日)

平成29年は、『新万葉集』が刊行されてちょうど80年の年でした。『新万葉集』とは、明治・大正・昭和に詠まれた短歌を、著名な歌人たちが選歌・自選し2万6千首あ

まりを収録した近代の『万葉集』です。佐佐木信綱、北原白秋、斎藤茂吉など当時を代表する10名の歌人が審査員(選者)となり、そのうち女性は与謝野晶子のみでした。

本展では、与謝野晶子をはじめ、『万葉集』に感銘と影響を受けた歌人たちが選歌した『新万葉集』の歌を通して、時代を超えても変わらないその思いを知っていただきました。

まず、最初のコーナーでは、晶子をはじめとする近代歌人たちが影響を受けた『万葉集』について明らかにしました。奈良県立万葉文化館より、江戸時代の版本や、ドイツ語訳の縮刷本、万葉かるたなど視覚的にも美しい貴重な資料をお借りすることができました。特にかるたは人気が高く、復刻版を出してほしい、長い時間観ても飽きない、万葉集の歌がよくわかる、といった感想が多く寄せられました。親子で楽しみながら観ている姿もありました。

次のコーナーでは『新万葉集』が刊行された時代背景を年譜パネルとともに紹介しました。当館

では『新万葉集』を所蔵していないため、全11巻を市立中央図書館よりお借りしました。刊行時は、日中戦争が勃発するなど太平洋戦争に向かい始める時期であり、思想統制の強化から出版物への検閲も始まる頃でした。『万葉集』の「ますらおぶり」の歌が国家の政治的なプロパガンダとして利用される中、『新万葉集』の刊行もその一つの事業と位置付けられ、短歌史や晶子研究においてもほとんど顧みられることがありませんでした。そのため、本展で初めて『新万葉集』を知った方が多く、「読んでみたい」と「書名は聞いたことがあるがこんな歌集とは思わなかった」と、『新万葉集』の存在を知っていただく機会にもなりました。

『新万葉集』の歌には、『万葉集』と同様に人間や自然への愛に溢れた歌が多く、現代、そして未来にも通じる人間本来の普遍的な思いが込められています。本展のテーマであるその思いを紹介するため、『万葉集』の歌と『新万葉集』の歌をテーマごとに分けてパネルで対比させました。また、来館者の方に短歌を作っていたくコーナーを設けて参加していただきました。

最後のコーナーでは、晶子を含む10人の選者一人一人を、パ

ネルと著書などで紹介しました。中でも、与謝野夫妻と斎藤茂吉の連名の書簡は、初公開資料で結社を超えた3人の交流と『万葉集』への思いを感じていただきました。また、選者たちの関係館にご協力いただき、肖像写真入りのパネルを製作し、各館のパネルを配布して紹介しました。また、『新万葉集』の装幀を手掛けた横山大観画「不二霊峰」を小林美術館(高石市)より借用し展示いたしました。あらためて『新万葉集』が一流の芸術家たちによって手がけられたことを感じていただけたと思います。

無料配布の解説パンフレットは非常に好評で、会期の終盤には在庫切れとなりました。

本展では、『新万葉集』全巻と晶子の自筆原稿や歌幅・色紙をはじめ、斎藤茂吉の愛蔵書の『万葉集』注釈書など約50点を展示しました。特に、改造社の社長山本實彦の出身地である「薩摩川内まごころ文学館」より晶子の『新

万葉集』自筆原稿をお借りすることができたことは非常に良かったと思います。晶子の自筆原稿には推敲の跡が見られ、削除された歌も書かれており、その選歌の過程をみることもできます。晶子が心血を注ぎ、未来の人たちに遺したいという想いが伝わる貴重な資料に足を止めてご覧になる方が多くいらっしゃいました。(森下)



与謝野晶子著『歌の作りやう』
(大正9年、東京堂書店刊)



与謝野晶子著『新訳栄華物語』上巻
(大正3年、金尾文淵堂刊)



雑誌『冬柏』(昭和5年～昭和21年、冬柏発行所刊)

平成29(2017)年度
新収蔵品紹介



駿河屋のラベル
元祖練羊羹
御菓子商標ラベル
駿河屋屋号・住所・電話番号記載ラベル
駿河屋取扱商品ラベル

●与謝野晶子倶楽部より
雑誌『冬柏』や書籍『歌の作りやう』
など25冊。

▼与謝野晶子・寛が中心となって刊
行した雑誌『冬柏』が252冊。特に、
創刊年の合本になっていないものや、
晶子没後の昭和17年以降のものは希
少価値が高いため、貴重な資料です。
また、書籍類では、晶子の歌論書『歌
の作りやう』が特に装幀も美しいの
で、展示資料としても活用いたします。
さかい利晶の杜(与謝野晶子記念館)
の開館を機に寄贈を申し出られまし
た。

●宮風武司氏より
駿河屋商品ラベルや与謝野晶子・寛の
著書や雑誌、研究書など60点。

▼晶子の生家、駿河屋の商品ラベル
は、入手困難で希少価値が非常に高
い資料です。また、第二次『明星』
や晶子の著書は、美しい装幀で状態
もよいため、展示資料としても活用
いたします。

ご寄贈いただいた宮風武司氏は堺生
まれの堺育ちで呉服商を営んでおら
れました。与謝野晶子を敬愛しその
資料を長年収集され、さかい利晶の
杜(与謝野晶子記念館)の開館を機
に寄贈を申し出られました。(森下)

利休の作意

中村 利則

妙喜庵のある大山崎は、京都と大阪の府境、天王山麓にある。古くは嵯峨天皇の河陽離宮が営まれていて、その後には故地に山城国府が置かれたときもあり、平安京から、あるいは平安京へと出入りする要の地となっていた。かつては播磨大路、あるいは唐街道などとも呼ばれた西国街道が通り抜け、大山崎は水陸両路の交通の要衝として活況を呈した町であった。織田信長が本能寺に横



国宝・妙喜庵待庵 撮影：田畑みなお

死した天正十年、その後継を目指した秀吉は天王山中腹に山崎城を築き始め、この地を天下の都城とすべく計画もされた。しかし翌十一年夏、秀吉の大坂への転進によって、その計画も半ばで頓挫して、廃城とされてしまった。

ところで妙喜庵は、もと連歌師山崎宗鑑が大山崎の竹林中に営んだ草庵(対月庵)を、明応(一四九二〜一五〇一)頃に春嶽土芳が譲り受け、創建された東福寺門末の禅刹である。南に高く石垣を築いた台地には、文明(一四六九〜八七)頃の造立と伝えられる方丈書院(重要文化財)を中核として、東に鞘の間を挟んで八畳座敷(旧明月堂写し)があり、北方背後に寛政三年(一七九一)に建てられた庫裏が接続している。そして茶室待庵は、もとは方丈書院の中門廊であったと考えられる鞘の間の南端に、南面して構えられている。

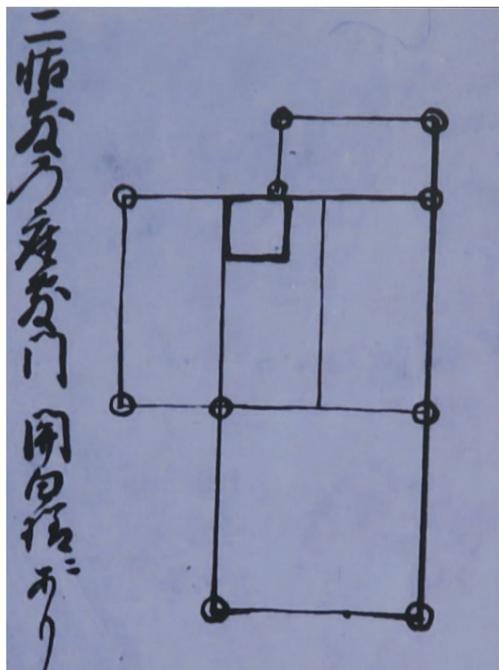
柿萱切妻造りの屋根を架け、妻入前面には庇を付け下ろして、南側に深い土庇を形成する。茶室内部は客畳一帖と手前畳一帖だけの、合わせて二畳という極小の空間である。そして手前座の左手に太鼓貼りの二枚襖を隔てて勝手(現在は「次の間」と称する)一帖、その北に取り合い(現在は「勝手」と称する)一帖が付随し、全体はほぼ一丈(十尺)四方の、すなわち方丈でもある。南向きに開く、幅、高さとも、のちの定めからは二回りほど大きい躰口を入った正面に床を構えるのも、器物賞翫を第一義とした利休の茶の湯を物語っている。間口幅四・〇六尺、入隅の柱を隠して土壁を塗り廻し、床天井も高さ五・三二尺と、異常に低く抑えて土壁を塗り上げた、いわゆる室床であり、そ

して粗野な丸太材や面皮材、床框の三つの切節や長坊の乱れ飛ぶ荒壁の表情とともに、その力強く緊張した空間は極侘びに徹しており、そこには草庵茶室の姿が大成されていて、待庵はその原点とも論じられてきた。

この待庵には、天正十年から十一年という時代の特性と、草庵小座敷の先駆としての古態が、確かに多く遺されている。たとえばあの大きな躰口、また左右の床柱とともに打たれた花掛釘や、下端にわずかながら面皮を残した床の落掛、そして障子に使われた竹骨の組子、あるいは壁の下地として木舞竹ではなく葺が使われ、えつり竹を貫状に用いている仕様など。その壁に穿ち明けられた窓は、それこそ下地窓という字義通りのもので、他に類例をみず、手法と技術的な古態が認められるのである。左勝手にして、上座床の構えは武野紹

鷗時代からの常道に倣いながらも、炬を手前畳の左隅、向炬隅切(隅炬)に切るという斬新な構成である。それはそれまでが手前畳の横手に炬を出して切る、出炬の四畳半切や平三畳敷での上切しか例がなく、入炬の隅炬はどこか台子の風炉・釜をユカ下に埋め込んだようで、厳格さを秘めながらも、亭主の身体はやや外向きになり、客に対して密やかに手前する、茶立所の雰囲気さえ漂わせている。

ところでこの待庵の建立については、不明な点が多い。ただ江戸時代の地誌や茶書の多くは利休が秀吉の命により妙喜庵に創建したと記していた。そうしたなかで堀口捨己は、待庵と方丈書院鞘の間との接合の不具合などから、利休が妙喜庵に創建したとする伝承はそのまま信じられず、利休作は揺るがないものと考えながらも、元



関白様御座敷 二帖敷図
『山上宗二記』所載 齋田記念館蔵

から妙喜庵に建てられたものではない、と論じられた。そして待庵が創建された時期と場所については、利休と秀吉との関わりを認め、秀吉が山崎城を営んだ時、秀吉に随伴して大山崎に屋敷を構えた利休が、その屋敷内に好んだ茶室が待庵であるとする。ただ翌十一年の大坂転進に伴う山崎城廃城後は、「宝積寺松図」に描かれた利休屋敷も撤

収され、茶室待庵はその近所の、利休とも親交のあった功叔和尚の妙喜庵に再興されたのであろう、とする仮説を立てられ、それが伝承以上に説得力を持って学説的に踏襲されてきた。

しかしながら江戸期以来の諸書における待庵の、秀吉との伝承に加え、その創建に関わる利休書状を読み解いていくと、その仮説にも疑問が生じ、待庵は秀吉の要請により、折から築造が進められていた山崎城において、利休が造立したと考えられるほうが蓋然性をもってきた。『山上宗二記』に掲出された「関白様御座敷」二畳も、それまでは大坂城山里の二畳に比定されてきたが、その内容から、これこそ山崎城での創建待庵を記すものであると想定されるに至った。そしてそれは天正十一年三月には竣工していたものの、秀吉の大坂転進にともない、創建待庵は席披きもされることなく取り壊されてしまったのだろう。それを惜しんだ秀吉は改めて大坂城で利休に命じて造ったのが、山里の二畳であったと考えられる。

取り壊された創建待庵は、天正末年頃、おそらくは利休も秀吉も亡くなった慶長三年(一五九八)過ぎに、利休とも、秀吉とも親交のあった妙喜庵の功叔和尚がその遺材を譲り請け、自坊に再興したのが現在遺る国宝待庵なのだろう。そして待庵に見られる間口四尺の床や、前面の土庇など、時代が下ると考えられる要素は、時代風への変容でもあった。

(なかもつ)としのり／京都造形芸術大学 歴史遺産学部教授)